

平成25年度「県立学校復興交流推進事業」実施報告書
 ～ 復興支援活動 これからの岩手を担う人材の育成 ～

[花北青雲高等学校]

1 事業目的

総合生活科の学校設定科目「生活産業経営実践」における社会に貢献する人材の育成に資するとともに、被災地の方々との交流等をおして岩手の復興を支援する。

2 活動内容

| 名 称 | 実 施 日 | 活動場所 | 参加対象 | 参加人数 |
|-------------|----------------------|---------------------|--------------------|-----------------|
| (1)被災地視察 | 6月24日(月) | 大槌町内 | 総合生活科3年 | 40名 |
| (2)商品開発 | 7月～12月 | 花北青雲高校 | 総合生活科3年 | 40名 |
| (3)開発商品試食会 | 9月20日(金) | 大槌町復興食堂 | 総合生活科3年 大槌町民 | 生徒 8名 計 18名 |
| (4)開発商品普及活動 | 10月19日(土) ～20日(日) | 花北青雲高校 | 総合生活科3年 | 40名 |
| | 12月10日(金) | 大槌町福幸商店街 | 総合生活科3年 商店街経営者等 | 生徒 16名 計 26名 |
| (5)被災地交流活動 | 12月10日(金) | 大槌町おさなご幼稚園 大槌保育園 | 総合生活科3年 園児 | 生徒 24名 |
| | 12月10日(金) | 大槌町安渡公民館 | 総合生活科3年 仮設住宅住民 | 生徒 40名 計 58名 |

3 実践事例

家庭の専門学科である総合生活科は、コミュニケーション能力を伸ばしながら、衣食住などの地域生活文化や保育・高齢者の福祉などを専門的に学び、地域に貢献する人材の育成を推進している。生徒は昨年度の3年生から大槌復興支援の取り組みの報告を受け、先輩に引き続き支援していくことが社会貢献に繋がることだと考え、自分たちの専門の学習を活かした取り組みで支援できることを検討することにした。

(1)被災地視察

まずは被災地の現状を知ることから始めた。インターネット等での情報収集の後、6月24日大槌町の一般社団法人「おらが大槌夢広場」の代表である臼沢和行さんに依頼し、被災地視察をした。生徒の中には初めて被災地を訪れる者もあり、時間の止まった大槌町役場前で臼沢さんから震災当日の話や現状を聞きながらの視察は心に響くものであり、嗚咽が止まらなくなる生徒もいたほどである。土台だけとなった家のコンクリートに未だ帰らぬ家族に充てたメッセージからは、被災者の思いが痛いほど伝わった。神戸大学の大学院生が再現した大槌町のジオラマと現在の大槌の風景を比べながら、2年以上経った今でも復興がほとんど進んでいないことも痛感した。現地足に足を運ばなければ感じる事ができなかった被災者の思いに、少しでも触れることができた貴重な時間であり、今私たちにできることで復興に関わっていきたいという思いを再認識した視察となった。



写真1:視察後復興食堂で臼沢さんと

(2)商品開発

被災地視察後話し合いを重ね、「おらが大槌夢広場」の方々の意見も参考にして、大槌町の特産

品である「大槌鮭」と「ピーマン味噌」を使って商品開発に取り組むことにした。この商品開発を通じて、大槌の産業や観光の活性化の一助になればと考えた。クラス全員でアイデアを出し合い、大槌鮭を使った「ライスバーガー」と「フランクフルト」、ピーマン味噌を使った「かりんとう」と「ドーナツ」を作ることに決めた。製造班では何度も試作・意見交換・改善を重ねて、販売できる商品とするべく試行錯誤した。

「ライスバーガー」は、ご飯をセルクルで丸形にし表面をホットプレートで焼いて焦げ目を付けた。バンズは、粗みじんにした生鮭に蓮根のみじん切りを加えて食感を良くした。大葉と生姜ベースの和風たれを挟んで重ねる。「フランクフルト」は、生鮭をフードプロセッサですり身にし、すり下ろした山芋を加えて口当たりを良くした。これに乾燥バジルとブロックチーズを加えたもの、青のりとわさび醤油を加えたものの2種類を提案した。「かりんとう」は、生地ピーマン味噌を練り込んだものより表面にからめた方がピーマン味噌の良さが生かせるものになった。生地は薄力粉にBPを加えて固くならないように工夫した。「ドーナツ」は、ピーマン味噌と白餡を合わせたものを餡にして生地丸く包んで揚げた。生地は薄力粉とBPとマーガリンの配合を工夫し、二度揚げすることでサクサクのドーナツとなった。



写真2:活動内容についての検討



写真3:試作品の試食と改善点の検討

(3)開発商品試食会

9月20日、試作品を持参し大槌町を訪問した。「おらが大槌復興食堂」の岩間さんご夫妻、「NPO法人まちづくりぐるっとおおつち」の小向さん、ピーマン味噌製造者の八幡さんらを前に商品のプレゼンテーションをさせてもらった。その後、試食をして頂き意見を伺った。高校生の嗜好や斬新な発想を褒めて頂き、また大槌町の方々の意見を伺ったことは、その後の活動の大きな励みとなった。

頂いた意見は学校に戻って商品の改善に活かし、同時に大槌町をPRするネーミングを考案した。「ライスバーガー」は「大槌鮭飯バーガー」と名付け、食感を良くするために生玉葱のスライスをトッピングで挟み、焼いたライスにとろみを付けた和風だれを塗ることにした。「フランクフルト」は、バジルチーズ味が好評でこれを揚げてサクサクの食感を出すことにした。メンチカツ風の「大槌さん家(=産地)の鮭勝(さけかちゅ)」と名付け、生鮭はすり身と粗みじんの半々で用いて食感も改善した。「かりんとう」は「みそピーかりんちゃん」、「ドーナツ」は「ピーマン味噌入りみそど。」の商品名で売り出すことにし、同時にそれぞれの商品ラベルの考案や、パッケージの選定など全員でアイデアを出し合って決定した。



写真4:大槌町での試食会

(4) 開発商品普及活動

① 青雲祭での販売

本校の文化祭は10月19・20日の2日間で一般公開は20日のみであったが「大槌鮭飯バーガー」90個、「大槌さん家の鮭勝」120個、「みそピーかりんちゃん」1袋60g入り150袋、「ピーマン味噌入りみそど。」1袋3個入り150個を製造した。大量生産にあたっては、冷凍保存等の課題解決も図り生産にこぎ着けた。販売にあたっては、販売班が大槌町をPRするために製作した「鮭とピーマンをモチーフにしたエプロン」を着用した他、自作の紙芝居の読み聞かせや研究の経過報告等も行った。いずれの商品も好評で完売であった。



写真5:文化祭での大量調理



写真6:自作エプロンを着用しての販売

② 大槌町福幸商店街での普及

12月10日、大槌町福幸商店街を会場に商店の方々に開発商品の普及活動を行った。それぞれ、試作品とレシピとチラシを持参し、プレゼンテーションを行って商品のPRした。10名程の方が参加して下さった。これまで取り組んできた開発商品のアイデアを大槌町の方々に役立ててもらうことが目的であったが、プロの目から見た改善のアドバイスも頂き参考になった。学校に戻ってから、さらに改善を加えてレシピを完成させた。



写真7:福幸商店街でのプレゼンテーション

(5) 被災地交流活動

① 園児との交流

12月10日、大槌町のおさなご幼稚園と大槌保育園の2カ所に分かれて訪問した。午前中の数時間ではあったが、折り紙でクリスマス飾りを折ったり、「赤鼻のトナカイ」の手話合唱を一緒に行い、笑顔あふれる交流会になった。園児たちはとても元気で、逆にパワーをもらった様子であった。

② 被災者との交流

12月10日午後、安渡地区の仮設住宅に住む方々と交流をした。ほとんど高齢者であったが、18名ほどの参加があった。一緒に折り紙でクリスマス飾りを折ってツリーを完成させたり、開発商品の試食をして頂き、私たちの取り組んできた活動の中間報告もさせて頂いた。ま



写真8:園児との交流

た、「ハナミズキ」などの手話合唱を披露したところ、涙ぐむ方もいて、短い時間ではあったが感動を共有することができた。

最後に、一人ひとりが心を込めて作った正月のしめ飾りをプレゼントさせて頂いた。このしめ飾りは、文化祭で開発商品を販売した際の収益金で材料を準備し、個々に工夫を凝らして異なる飾り付けをしたものである。昨年の取り組みでもしめ飾りをプレゼントしており、大事にしまっておられるという方がほとんどであったが「今年ももらえるとは思わなかった、新しいしめ飾りが飾れる」と喜んで頂いた。その日参加できなかった方の分も後日渡して頂き、お礼の集合写真が届いた。



写真9:安渡地区の方々との交流



写真10:手話合唱披露

4 成果と課題

(1) 成果

今事業での活動は、専門に学んでいる学習内容を活かした活動ができた。また、被災地の方々との交流や大槌町の産業・観光の活性化を目指した特産物を使った商品開発と普及活動をとおして、岩手の復興や地域社会の再生に積極的に貢献しようとする意識付けができたのではないかと思います。

この活動の成果として、生徒の感想の一部を紹介する。



写真11:プレゼントしたしめ飾りの製作

私は震災後初めて被災地を訪れた。このような復興支援を行う機会がなかったら一度も行くことはなかったかもしれない。正直私は、被災地に対して「また地震がきたら嫌だな」「被害にあいたくない」という印象をもっていた。しかし、被災地の現状を把握し活動を行っていくうちに、自分の考えはとても失礼で偏見があることに気が付いた。そして私は祖父に「瓦礫が無くなるのが復興に繋がるとは限らない、人の心の復興の方が大事なんじゃないかな」と言われたことが今でも心に残っている。私たちは商品開発やPRを行ったりお正月飾りを作るなど、どちらかというと人の心に触れたり、コミュニケーションをとる活動が多かったように感じる。商品のPRをしたとき「こんな発想はなかった」と言われたことや、公民館で被災者の方に「私たちは若い人たちの笑顔にパワーをもらっている」と言われたことが今でも忘れられない。私たちの豊かな発想や3Dならではの明るさは被災地の方々を元気に、笑顔にさせることができたのではないかと感じた。そして私たち自身も被災地と向き合い、自分たちも楽しみながら活動し、人と人とのつながりを感じることができたと思う。

私が春から通う大学では、沿岸へのボランティアを行っているので、たくさん参加していきたいと考えている。また、大槌町をはじめとする沿岸の特産物を少しでも使用し、一人でも多くの人に伝えていきたい。

私たちはこの1年間、自らの力で次に何をすれば良いのか、相手が何を望んでいるのかを考え、大槌町の復興支援に取り組んできました。大槌町の方たちのために、できることを特産物に着目して展開しました。そして、利益を上げ、その利益で「貢献する」という形にできたと思います。高校生らしいアイデアを出し合い、大槌町の特産物を活かした美味しさや見栄えにこだわりました。そして、見学や交流会などをおして、震災の恐ろしさ、命の大切さ、沢山の人の繋がりの重要性を学ぶことができました。被災した大槌町役場前で、黙祷をした後に言った臼澤さんの言葉が今でも心に残っています。「笑われてもいいから、大切な人と大切な物だけ持って逃げる」「亡くなってからでは遅い、いつでもすぐに感謝の気持ちを伝えろ」というものです。大切な人を失った臼澤さんだからこそ言える言葉だと思いました。

社会貢献について学ぶ目的で始めた大槌町の復興支援でしたが、これで終わりではありません。3月に卒業して、それぞれの道に向かって進んでも、大槌町をはじめ、被災した誰かのために、自分ができることを考え、活動をしていきたいと思っています。

(2) 課題

被災者と交流する回数を多く持ちたい希望が多かったが、被災地までの移動時間と距離、掛かる交通費が課題である。

5 まとめ

被災地のために「今、私たちにできることをしたい」との思いで取り組んできた復興支援活動であるが、現地に足を運んでその場に立ち、被災者と会話をしたからこそ「感じること・見えてくるもの」があることに、生徒は気付かされた様子である。被災者の方々から「花北青雲高校さんはいつも足を運んでくれるので協力したい」と言って頂いたことの重みを感じながら、これまでの繋がりをここで終わらせることなく繋いでいけるよう、校内発表会や実習室前廊下への掲示という形で後輩に伝えている。この思いが後輩たちに受け継がれていくよう支援していきたい。

今回の貴重な取り組み関わった総合生活科の3年生は、卒業後も社会の一員として「自分に何ができるのか」を考え行動し、これからの岩手を担う人材として活躍することを期待している。

【別紙様式1】

平成26年度「県立学校復興支援交流推進事業」実施報告書 ～復興支援活動 これからの岩手を担う人材の育成～

[花北青雲高等学校]

1 事業目的

総合生活科の学校設定科目「生活産業経営実践」が目標としている、社会に貢献する人材の育成に資するとともに、被災地の方々との交流等をおして岩手の復興を支援する。

2 活動内容

| 名 称 | 実施日 | 活動場所 | 参加対象 | 参加人数 |
|-------------|----------------------|------------------------|-------------------|---------------|
| (1)被災地視察 | 6月30日(月) | 大槌町内 | 総合生活科3年 | 40名 |
| (2)商品開発 | 7月～12月 | 花北青雲高校 | 総合生活科3年 | 40名 |
| (3)開発商品普及活動 | 10月25日(土)～ 26日(日) | 花北青雲高校 | 総合生活科3年 | 40名 |
| | 12月5日(金) | 大槌町役場産業振興部 | 総合生活科3年 | 8名 |
| (4)被災地交流活動 | 6月30日(月) | 大槌高校 | 総合生活科3年 普通科3年 | 40名 計62名 |
| | 12月5日(金) | 大槌町おさなご幼稚園 | 総合生活科3年 園児 | 生徒17名 |
| | 12月5日(金) | 大槌町安渡公民館 | 総合生活科3年 仮設住宅住民 | 生徒22名 計44名 |
| | 12月5日(金) | 高齢者サポートセンター 和野っこハウス | 総合生活科3年 仮設住宅住民 | 生徒31名 計42名 |

3 実践事例

家庭の専門学科である総合生活科は、コミュニケーション能力を伸ばしながら、衣食住などの地域生活文化や保育・高齢者の福祉などを専門的に学び、地域に貢献する人材の育成を推進している。生徒は、前年度2月に、平成24年度から継続している大槌復興支援活動の報告を受け、継続的な支援の必要性を再確認し、復興支援に取り組むことが社会貢献につながると考え、専門領域の学習を生かした内容を復興支援の形にすることを活動方針とした。

(1)被災地視察

はじめに、被災地の現状を理解するため、インターネット等での情報収集を行った。また、津波被害の映像記録を視聴し、改めて被害の甚大さを確認した。

6月30日、大槌町一般社団法人「おらが大槌夢広場」の代表である白沢和行さんに依頼し、被災地を視察した。震災当時の話や復興の現状を、自身の体験をもとに語られる言葉の重みを生徒は実感したようであった。震災前の美しい町並みを想像することは難しく、瓦礫処理の後、嵩上げ工事が進み、仮設住宅での生活も長くなるにつれ、様々な課題と向き合わなければならない現状があることを知った。



写真1 白沢さんが伝える大槌の現状

大槌町赤浜から望む蓬莱島に祀られている守り神「弁財天」である水の神の伝説を聞きながら、漁業は

大槌町の生活に欠かせないものであること、基幹産業である水産業は、水揚げ量は震災前まで回復しつつあるが、生産年齢人口の大幅な減少による後継者不足等の課題に直面している現状を知り、漁業再生の困難さを実感した。

現地に足を運び、自分の目で見て肌で感じたことで、被災者の思いに触れると同時に、今私たちのできる復興に関わっていききたいという思いを明確にする視察となった。

(2)商品開発

被災地の視察後、個々に収集した情報を持ち合い、グループでの協議を重ね、大槌町の特産品である「いか」を活用した商品開発の方向性を決定した。この商品開発を通じて、大槌町の産業や観光の活性化につなげることを目的とした。クラス全員でアイデアを出し合い、ケーキやライスコロッケ等、6品のアイデアレシピから、味や見た目、意外性等に商品化のポイントを置き、試作と試食の評価を重ね、「いかのナゲットフライ」と「いかの揚げまんじゅう」の商品化を決定した。

商品開発を具現化するための体制（組織）づくりとして、調理作業を担う製造班と、商品販売の促進を担う営業班に分かれ、個々の役割を明確にすることで、個の様々な能力を組織の力に十分に反映させる方法を採用した。商品のネーミングは、「いかのナゲットフライ」は、すり身状とさいの目状のいかの身に、キャベツや山芋などの野菜を加え、パン粉の衣をつけて揚げた商品であることから、「ベジイカフライ」と名付けた。また、「いかの揚げまんじゅう」は、まんじゅう生地はイースト菌による発酵生地とし、冷めても硬くならないよう工夫した。まるで宝物のような豊富な食材を包んだまんじゅうであることから、「大宝いかまん」と名付けた。同時に、生徒の発想力に主眼を置き、商品ラベルの考案やパッケージの選定などにも取り組んだ。



写真2 商品開発アイデアの検討



写真3 いかを使った商品の試食評価

(3)開発商品普及活動

①青雲祭での販売

本校の文化祭は10月25、26日の2日間で、製造班は、早朝から食材の下ごしらえと調理を担当した。営業班は、活動報告の掲示や店舗の看板作り、いかの特徴や魅力を表現したオリジナルエプロンやゆるキャラマスコット（名称：ポッポーズ）を製作し、企画商品のPR活動を行った。即完売になることが予測されたため、販売時間と販売数を決めて販売したが、限定商品に期待が集まり、並べた先から完売となる盛況ぶりで、いずれの商品も好評をいただいた。



写真4 製造班による開発商品の調理



写真5 営業班による青雲祭での販売

②大槌町産業振興部での普及

12月5日、大槌町産業振興部を訪れ、職員の方々に開発商品の普及活動を行った。防災集団移転促進事業など、新たな街づくりの取り組み等について説明をいただいた後、試作品とレシピを持参し、開発商品のPRを行った。試食評価では、おいしいとの好評と同時に、冷凍後の味の変化等、加工段階の課題も指摘があり、様々な視点での意見は、レシピの改善につながる内容であった。



写真6 大槌町役場にて開発商品のPR

(4)被災地交流活動

①大槌高校生との交流

6月30日、大槌高等学校を訪れ、同世代である3年生との交流活動を行った。震災後の地域社会を再生していく世代同士の、震災経験や高校生としての今、そして未来への夢を語り合い、個々の思いや願いを共有し合う時間となった。震災の状況＝過去、復興の様子＝現在、これからの活動や夢＝未来に視点を置き、率直な言葉で情報交換が行われた。「将来は必ず大槌に戻り、自分たちが復興、再生の主軸になりたい」という言葉に、郷土愛や町の再生への決意を感じた。また、東京大学のボランティア支援で継続している活動（定点観測）などの復興研究会の取り組みや、まちづくりに積極的に取り組んでいる現状も知ることができた。



写真7 大槌高校3年生との交流会

②園児との交流

12月5日午前、大槌町のおさなご幼稚園を訪問し、年少、年中、年長に分かれて交流活動を行った。到着時、園児たちの元気な歌「あわてんぼうのサンタクロース」に迎えられ、すぐに和やかな雰囲気の中、楽しい交流がスタートした。年少はクリスマス飾りの折り紙、年中はフルーツバスケット等のゲーム、年長は魚釣りゲームの活動を行い、最後は全員で妖怪体操を踊り、笑顔あふれる交流となった。また、大槌保育園には、手作り靴下マスコットにお菓子を入れたクリスマスプレゼントを園児に贈呈した。



写真8 おさなご幼稚園園児との魚釣りゲームで交流

③被災者との交流

12月5日午前、安渡地区の仮設住宅で暮らす方々との交流を行った。ほとんどが高齢の方で22名の参加があった。34軒の仮設住宅を一軒ずつ訪問しながら、生徒たちが心を込めて製作した正月のしめ飾りをプレゼントさせていただいた。昨年贈られたしめ飾りも大切にしている方も多く、新しいしめ飾りを手に取った方々からは、溢れる笑顔と感謝の言葉をいただいた。



写真9 安渡地区仮設住宅の方を訪問

公民館では、方言のクイズや単語探しゲームなどでの交流を行い、一つの円になり行った参加型手話合唱では、元気な歌声とともに穏やかな表情を側で感じ、心身ともに温かくなる時間を共有することができた。

開発商品の紹介では、調理場をお借りし、下ごしらえした試作品の仕上げ（揚げる作業）をした後、出来立ての商品を試食していただいた。「やわらかくで食べやすい」、「塩分は控えた方がよい」等、高齢の方の視点の感想や改善点を伺うことができた。



写真10 安渡地区仮設住宅の方との交流会

12月10日午後、高齢者サポートセンター和野っこハウスにて交流会を行った。町の中心地から10km程離れた大槌第5仮設団地に隣接する施設であり、高齢者を中心とする方々の趣味活動や健康維持活動、介護予防教室等を企画、開催する場所である。職員の方に依頼し、仮設団地で暮らす高齢の方に10名程集まっていたき、梅の飾りを付けた箸袋づくりを一緒に行った後、児童・高齢者福祉コース選択者20名によるオペレッタを披露した。歌に合わせて手拍子をしたり、動物の登場に驚き、思わず笑ったりと楽しい時間を過ごしていただくことができた。ある生徒は、大正生まれの元気なおばあちゃんから伝えられた生涯二度の大津波の体験や「津波でんでんこ」の教訓が心に強く響いたと話していた。



写真11 和野っこハウスにて交流会

4 成果と課題

(1) 成果

今事業での活動は、専門に学ぶ学習内容を生かした活動ができた。また、被災地の方々との交流や大槌町の産業・観光の活性化を目指した特産物を使った商品開発と普及活動をとおして、岩手の復興や地域社会の再生に積極的に貢献しようとする意識づけができたのではないかとと思われる。

この活動の成果として、生徒の感想の一部を紹介する。



写真12 和野っこハウスにてオペレッタを披露

・・・高齢者サポートセンター和野っこハウスの交流会の中で、大正生まれの90歳になるおばあちゃんに出会いました。おばあちゃんは悲しそうな表情で震災当時の状況を伝えてくれました。そして、「もし、津波が来たら何も持たないで早く高台に逃げるんだよ」と、私の手をギュッと握りながら繰り返し話してくださいました。震災は二度と起こってほしくないという強い思いが伝わってきました。そして、心の面での復興はまだ進んでいないし、たとえ、交流をしても気持ちが楽になるのは、ほんの一時に過ぎない。私は交流をとおして、そばで話を聞いてあげることしか支援ができない歯がゆさと同時に、今の自分にできる精一杯の支援の形であると感じました。

被災者の心の復興は、これからの課題なのかもしれません。それに立ち向かうのは、未来をつくる若い世代の私たちなのだと思います。この活動から学んだことを生かし、私もできる限り、復興支援活動を継続していきたいと思います。

私にとって沿岸地区は小さい頃に遊びに行った思い出の場所です。復興支援活動に対しては、自分自身が役に立てる機会だという気持ちと同時に、何ができるのかという不安もありました。内陸に暮らす私たちは、大震災の辛さや悲しみのすべてを理解できるわけではありません。安渡地区の仮設住宅で暮らす方が大切にしていた絆ノートには「出会いは一度きり。一期一会」と書かれてありました。出会った人たち一人一人にメッセージを書いてもらっていました。出会いは一度きりで限られたものであっても、その時お互いに交わされた言葉はいつまでも心に残り、人と人とをつないでいると感じました。私は、復興支援活動をとおして、被災地に足を運び、自分の目で、肌でその現状を感じ、被災地の方々との対話で、少しでも笑顔になってもらえるような活動が大切なのではないかと気づきました。そして、支援の方法を学ぶ中で、物理的なものの提供や道具を使わなくてもできる支援があることを知りました。チームだからできる支援、個人にしかできない支援、誰にでもできる支援と様々な形の支援があることをこの活動をとおして学ぶことができました。

私は卒業後、介護職に就き、地域福祉に貢献していきたいと考えています。相手の立場を理解し、心に寄り添う姿勢を持ち続けたいと思いました。

(2)課題

支援活動の機会を多く設定したいと考えているが、被災地までの移動時間、距離、交通費の捻出が課題と考える。

5 まとめ

家庭の専門的学習の学びを生かした被災地支援のあり方を考え、2年間の基盤に、3年目の思いをのせた継続活動として取り組んできた復興支援であるが、現地に赴き、自身の目で見て感じたことや様々な世代の方との対話での気づきにより、活動の意義や必要性をより深く理解することができたようであった。震災復興には、地域を創りあげていく人材として高校生の力は重要であり、その育成につながる学習活動を今後も継続していきたいと考える。

今回の活動に関わった生徒たちは、卒業後も社会の一員となり地方創生に関わる人材として、岩手各地で活躍することを期待している。